

閉会 の 挨拶

千葉正喜

私は、昨日も紹介がありましたけれども、核反応データベースの国際交換ということをやっています。その観点から今日の議論で気がついたことを2点ほどお話ししようかと思えます。

1点目は、質的調査と量的調査の関係を別の言葉でいったらどうなるかということです。核反応データベースのフォーマットにNRDFというフォーマットとEXFORというフォーマットがあります。EXFORは国際的に協議して作られているデータベースですが、NRDFは田中先生が中心になって研究してつくられたフォーマットで、日本のデータを集めているデータベースです。これら二つのデータベースは、いずれも同じ分野のデータベースですけれども、核反応データをとらえる枠組みが違うイメージになっているのです。これを先程の量的・質的と関連させると、質的調査というのは対象をとらえる枠組みは何であるべきか、そこを明らかにするという段階ではないかと思えます。その枠組みが決まった段階でいろいろと調査をして、量的なものが明らかになっていく、ある属性がどんなふう to 値をとるかが分かっていく。このように考えると質的・量的の違いは対象を認識する場面の違いというふうに言い換えることができるのではないかということです。

2点目は、一次調査、二次分析についてです。データアーカイブが存在できる条件は何かに関係します。それは自然科学でいいますと、理論的研究と実験的研究という区分があるわけですが、これらはある程度、分業になっていると思えます。核データのデータベースもそうなのですけれども、データベースは、やはり実験的研究をサポートすると同時に、理論研究をサポートする必要があると思えます。実験の仕事と理論の仕事が分業されることによって、データベースを必要とする条件があるのではないかと思えます。

そういう意味からすると、一次調査の方は調査データのアウトプットを出す出し方にある程度標準化がされなければならないし、また理論研究で二次分析をされる方は標準化された調査データが安心して使える状態になっている必要があることになります。これが調査データアーカイブの存在意義と条件ではなかろうかという感想をもちました。これが合っているかどうかわかりませんが、このような点を学ばせて頂けたことで今回のシンポジウムは大変意義があったのではないかというふうに、私は思っております。

原先生、佐藤博樹先生、それから佐藤健二先生、このような夏の暑い時期に、しかも夏休みの期間にもかかわらず時間を我々のためにさいていただいたこと、有意義なシンポジウムの時間を過ごさせていただいたことに、大変感謝をしております。どうもありがとうございました。